

ストックカンリ登頂記 (6153メートル)

自分が海外登山をしたのは33年前に日本ヒマラヤ協会の第二回登山学校に参加してネパール国境に近いケダルナートドームという7千メートル弱の山に登頂したのが最初ですが、その前年の第一回登山学校がラダックの最高峰のヌンという7千メートル峰で行われ、その記録を読んでからラダックの山に興味を持ち続けていました。さらにはその後にチベットにも興味を持ちましたが、ラダックは中国化されている本場よりも本来のチベットらしいということを知ってラダックに憧れるようにもなりました。

その後、海外登山の回数を重ねましたが、5年前にガッシャーブルム2を登った以降は体力の低下等もあって失敗が続き、もう高所登山からは足を洗おうかなとも考えていましたが、ストックカンリという山がラダックではポピュラーで手頃な割りには美しい山であることを知って、高所登山の復活を賭けて登ることにしました。

今回の計画は2名で予定していたものですが、同行者が出発10日ほど前にケガをしてしまい、どうなることかと気をもんでいたところ、一応問題はないとのことで成田空港で合流し、チェックインも済ませて登場直前となったところで、ケガをした箇所の異常を訴えたため、急遽参加中止になるというハプニングがありました。ただ、私一人の参加となっても、行動そのものには特に影響ないだろうという判断から、一人での参加に変更となりました。

7月14日

ストックカンリ登頂を目指す場合は通常は登山基地レーまでは往復ともフライトによるのが一般的だが、今回は往路は陸路をとることとした。理由はフライトによった場合は一気に富士山頂上付近まで上がるので、高所順化のためにレーに数日滞在してから登山活動に入る必要があるが、陸路だと5000メートル前後の峠をいくつも越えて移動するので、レーでの滞在なしにすぐ登山活動に移れるという利点があることと、レーへのフライトは天候によるキャンセルの可能性があるが、陸路の場合は大半が乾燥帯に行くためにその心配がないからである。結果として、陸路による所要日数が3日かかることは帳消しとなって、日程的なマイナスはほとんどないことになる。それにもましての陸路の魅力はラダックの広大な自然を肌で感じながら旅することができることである。

デリーに深夜に着いた日の夕方にツーリストバスでマナリに向けての夜行バスで旅立つ。

7月15日

12時間近く夜行バスに乗ってマナリ近くで最後の休憩に入った。その後、集落をいくつか通り過ぎるが、地元の人らしき数人が降りただけで、ほとんどの乗客は降りる様子がない。間もなくバスロータリーに着き、出迎えの運転手とも出会えて一安心する。

ここマナリは標高1900メートルあり、さすがに涼しい。このあたりでは比べるもののない大きな町だ。

遅い朝食を20円でたべてから、いよいよロータンス越えだ。

標高差~~2000~~₂₀₀₀メートルを一挙に登りロータンスに上がる。あたりにはタルチョー(チベット仏教のお経が書いてある旗)がはためき、完全にチベット文化圏にはいつてしまったことを知る。

峠から下は多少悪路あるものの概ね順調で、3時前にはケーロックのホテルに着く。ホテルの自分の部屋前のテラスで地元の酒を飲みながらタルチョーのはためくケーロックの町を見下ろし、はるか彼方にはラダックの山並みを眺めているひとときは至福の時間であった。

7月16日

朝4時にホテルを出発して、車はぐんぐんと高度を上げて行く。1時間あまりで標高5000メートルに近いバララッチャ峠に着く。



いきなりこの高度に上がっても息切れや頭痛といった高山病の症状は出ないので一安心する。その後も5000メートル前後の峠をいくつも越えていったので、正味半日くらいは5000メートルに近い高度に滞在したことになり、高所順化トレーニングの効果はそれなりにあったものと思われる。

朝のうちは小雨まじりで展望が効かなかったが、北に向かうにつれて次第に晴れてきて、カシミールの高原の雄大な景色が眺められ、このコースを選択してよかったと思った。

レーに向かう手前で目標の山ストックカンリが初めて姿を現す。思っていたよりも雪が多く美しい姿をした山である。



7月17日

レーに来たら是非行って見たかったのが旧王宮である。本場チベット首都のラサにある有名なポタラ宮もレー王宮を模倣したと云われている。

今日は午前中がフリーなので朝6時にホテルを出発して出かけてくる。観光客は誰もいなかったが、カギはあいていたので入って見る。中は薄暗くて特に見るべきものもないようだ。いくつかの部屋にはカギがかかっていたので、貴重品はその中に閉まっているのかもしれない。途中で作業かなにかしているような人に会ったのであいさつをしたが、もしかしたら、今は修復中かなにかで一般公開はしていないのかもしれない。

上の方の階まで行ってレーの市街地を一望してからホテルに戻ったが、一応は中に入れたので満足してホテルに戻る。



定刻2時にエージェントの車が迎えに来て一路ストック村に向かう。目標の山ストックカンリが前方に見えてきて登高意欲が高まる。1時間程度でストック村に着くが、そこから30分ほど下ったところにあるストック王宮にガイドと一緒にしてみる。こちらは今朝行ったレー王宮と違って、ミュージアムを兼ねているので、宗教用具、仏画、生活用具などが展示してあって興味深かったが、撮影禁止でお見せできないのが残念である。帰りは登りとなってガイドの早いペースに着いて行くのがたいへんだったが、ガイドが王宮行きに私を誘ったのは、恐らく私の脚力と高所順応具合をチェックする目的だったのだろうと推察される。呼吸が乱れることもなくガイドのペースについてこられたので、まずは試験合格か？



出発点に戻ると、少し上にテントが張られていた。しばらく休んでいるとテントの前にティーが運ばれてくる。景色を眺めながらティーを飲むのは遠征キャラバンの醍醐味である。

夕食は8時前とやや遅めであったが、最初にでてきたのはトマトスープとチャパティでこれだけでも結構ボリュームがあり、今日はたいして運動してないし、これだけでもいいかなと思ったら、ご飯とともにおかずが三品運ばれてくる。今日はベジタリアンだったけど、肉けがなくても全然物足りないという気がしなかった。最後は果物の缶詰のデザートであった。ひよっとしてインドに来てからの最高のご馳走だったかもしれない。ただ贅沢を云わせてもらえば一人で食べるのはやはり寂しい。1日2日ならばともかく、1週間もずっとなんだから、同行者がいればもっと楽しい食事ができただろに・・・

夕食が終わってテントに戻る時に対岸の下の方を見ると、昨日ケーロンからレー一に向かう時に通った道路に沿って散在する人家の明りがまたたいている。山からの麓の人家の明りはいつ見ても特別なものである。

こうして遠征1日目の夜は暮れていった

7月18日

ガイドと私がコックらに先行してストック村3700メートルを8時20分に出発。ガイドの足は今日も早い。まるでトレランのようだ。傾斜の緩いうちはなんとか付いて行ったが、急な登りになると付いていけずにマイペースに切り替えたなら格段に楽になる。ガイドが頻繁に休んでくれるので高所の影響もなく順調に高度を稼ぐ。

今日の目的地のマンカルモ4300メートルまでは予定では5～6時間ということであったが、途中で時間調整のために30分近くの大休止があったにもかかわらず、3時間ちょっとで着いてしまう。後続との時間調整のためちょっと早い、ここで朝もらったランチボックスを開けることに。なんか遠足にでも来た気分である。

長い昼休みを過ごしていると漸く下の谷間に後続の姿が見えたので我々も立ち上がる。キャンプ場はすぐ上の谷間が開けた気持ちの良いところであった。右の谷を回り込んだ先にストックカンリの頂上部分が見えるが、ルートは左の谷に入り、ベースキャンプ4800メートルを経て頂上を目指すらしい。

今日中にベースキャンプまで入ることも可能であったが、日程の余裕は十分にあり、高所登山に無理は禁物なので、高所順化を兼ねて、予定どおりここに留まることにする。

しばらくすると、後続もキャンプ場に到着する。他のパーティーとも入り乱れているので、我が隊のポーターが何人いて馬が何頭いるのかはわからないが、いずれにしても私一人のために相当数の人と馬が用意されている大名登山のようだ。さらにはテントの設営なども、お客さんである自分はノータッチというのがルールであるらしいので、国内の登山では味わえない妙な気分である。

1時過ぎには用意された自分のテントにもぐりこみ、お茶や菓子、果物のサービスを受ける。外の景色を眺めながら寛ぐひと時は最高だが、テントの入り口が山側ではなく、トイレ側となっているのは少し興ざめである。

ティータイムが終わっても、夕食までは5時間近くもあるが、ここで寝てしまうと夜眠れなくなってしまうので、今日の記録を忘れないうちに書いておいたり、持参した本を読んだりして時間を潰す。

夕方になってテントの外に出て見ると、お昼頃には数張りだったテントが十数張りに増えている。かなり人気のある山のように。明日のベースキャンプはもっとテントが多いのだろう。

今晚も夕食は肉なしだった。ベジタリアンといった覚えはないんだけどなあ。早くノンベジタリアンになりた〜い。

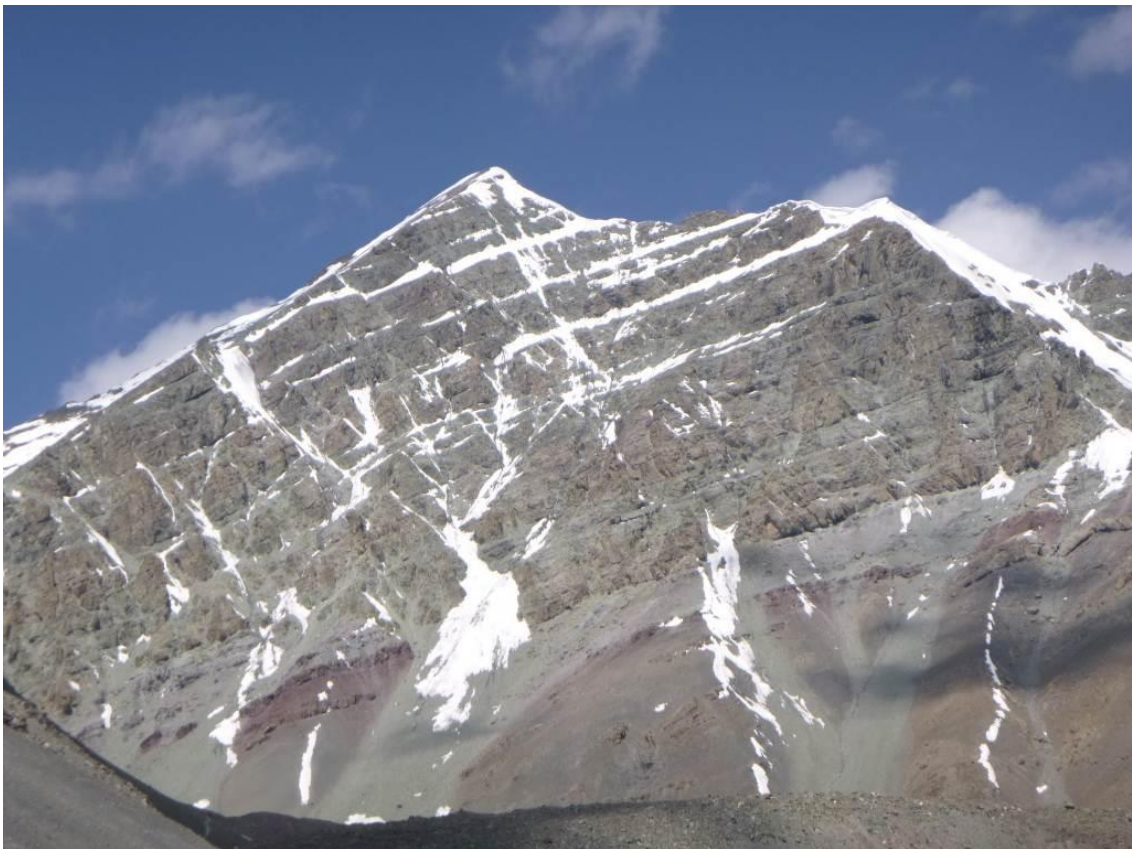
7月19日

今日の行程はBC4900メートルまでの標高差550メートルで予定表では5〜6時間となっているが、昨日の例から3時間もかからないだろうとタカをくくる。

今日は調子がよくガイドのペースにもついて行ける。出発する時には豆粒のように見えていた先行パーティーにもじきに追いついてしまう。ここまでの登高

速度は1時間で350メートル！である。4500メートルを越える高さでのこの速度は8000メートルを無酸素で登った5年前でも出せなかったと思うし、今じゃ平地でも無理かもしれないのに何を血迷ってしまったのだろう。そんなわけで何と1時間30分でBC到着である。早く着き過ぎて時間を持て余したので、BCから150メートルくらい上部の峠まで高所順応を兼ねて上がってみる。

峠からはBCでは見えないストックカンリの大岩壁が真正面に望めてなかなか迫力のある眺めである(もっとも我々が登るのは左側から回り込んだ稜線からであるが)。



その時は明日は休息の予定であるが、明日登ってしまって早くレーに戻りたいという気持ちがふと湧き起こって、ガイドに明日登頂したいと言うと、明日は

休日だと反対される。ここで言い争っても仕方ないので、BCに降りてからガイドを言いくるめことにして1時間くらい留まって高所順応を行うことにする。レーに早く戻りたくなかったのはアルコールの禁断症状が出たわけではなく(1週間近くの断酒なんぞは一昨年ハンテングリに行って以来であるが)、現代人の悲しい性であるが、ネットや携帯の環境から長期間隔絶されることに不安を感じたからである。ただ良く考えてみると、早く登頂を済ませて下山しても、ストック村からレーまでの交通手段確保の有無が不明であるし、仮にあるとしても、シーズン中のレーでの予定外の宿泊の可能性は乏しいことに気がついた。まあ仕事の段取りは整えて出かけてきたのだし、恐らく二度と来れないであろうラダックの山中で終日のんびりできるのは最高の贅沢なんだと思い直し、予定どおり明日は休日とすることにした。その場合でも、登頂の予備日は二日あるのだから、晴天続きのこの時期、高所順化が一層進んだ状態で登頂できなくなることは、ほとんど考えられない。

11時にBCに向けて下降すると、コックはもう到着していた。しばらくして昼食となり、メニューはヌードルと野菜炒めにツナのつけ合わせである。これで自分がベジタリアンだと思われていないことは判明したが、食いたいのはもっと歯ごたえのある肉なんじゃ！帰国したらインドでは絶対食えないピフテキをたらふく食ってやろう。食い物の恨みは恐ろしいんだから！？

食後の半日と明日1日は時間がたっぷりあるが、記録書きと読書で過ごす。本当はなにもせずにボケーとしているのが、いいのかもしれないが、生まれつきの貧乏症は死ぬまで治りそうもないようだ。

日が陰ってテントの中で読書するには暗くなってきたので外に出て見ると、テントの多さにびっくりする。まるで涸沢のテント村である。



ただ涸沢と違うのは荷物運搬用の馬がたくさんいてテントの間を歩き回っていることである。中には張り綱を引っ掛けられて倒されているテントもあった。多分夜中にはどこかに連れて行かれるのだろうが、首に鈴をつけてゴロンゴロンされたのでは眠れたものではない。まあドンキーがいなかっただけでも幸いである。なぜなら愛らしい風貌とは裏腹に、この世のものとも思えない無気味な声で鳴くからである。

夕食ではまたもやベジタリアンであった。四本足とは言わないまでも二本足でもいいから足のある動物の肉を食いたいものである。もっともクーラーボックスでもない限り、生肉は持参できないだろう。一昨年のハンテングリの高所キャンプでハムの塊をかじったのも侘びしかったが。ただ今晚はラダックに来て

以来、ずっと食べたいと思っていたモモ(チベットを中心に食べられているギョウザの一種)が出てきたので二重丸としておこよう。

明日は休日なので、早寝する必要はないのだが、外にやることもないので、早寝するしかないか

7月20日

夜半にかなり降っていた雨も明け方近くには止んでいた。用足しに外に出ようとテントを開けた途端に目の前に牛の顔が現れてびっくりした。馬は遠くに連れていかれたようであるが、牛までいたのか。さすがにインドである。

4時を回ったところであるが、峠までの道にはライトは見られず、どのテントにも明りはついていない。夜半の雨で出発を諦めてしまったのか、それとも出発したパーティはもっと早い時間だったのか。

上空はどんよりと雲に覆われていて星は見えない。明日は天気が回復してくれるといいのだが。

テントに戻り脈拍を測ると70/秒くらいで、昨日は午後は80/秒台だったのが、一昨日までの水準に戻り、順調に順化は進んでいるようで、天候も含めて今日は休日としたのは正解のようだ。夜明けまでもうしばらくの時間はとりあえずは音楽を聞きながらブログ書きで時間を潰す。

朝のうちは薄日がさしていた天候も、次第に雲が厚くなり、昼食を食べに食堂用テントに行っている間にアラレ混じりの雨が振り出した。ガイドが言うには、夕食の時に明日の予定を決めるとのこと。予備日が二日あるのだから、明日停滞となってもまだ十分登頂のチャンスは残されているわけである(高所順化もさ

らに進むだろうし)。乾季のこの時期、4日も悪天が続くことは考えられない(是非そう願いたい)が)。

朝から断続的に降り続いていた雨は夕方には猛烈な雷雨となり、明日の中止が決定となる。過去の高所登山においては悪天が3日連続したことはないので、明後日には多分登れるだろうが、問題は明日の停滞日をどう過ごすかである。持参した本は読み終えてしまったし、記録書きも停滞ではたいして書くこともない。レーのホテルに本を3冊おいてきてしまったことを悔いても後の祭りである。携帯は圏外のため本来は不要なのだが、ホテルに預けて万一紛失してしまってもいやだし、邪魔になるものでもないので持参したことを思い出し、なにか暇潰しになるものはないかと、普段はやったことがないゲームをやってみたが、どうも面白そうなものもないので 明日は退屈しそうだ。

7月21日

夜中には止んでいた雨が明け方にはまた降り出した。まあ高所キャンプでの停滞でないだけでしたが、早くこの雨が止んでほしいものである。

BC滞在3日目ともなってもかなり高所順応の方も進んできた。夜中に二度もトイレに行くほど代謝機能も活発になってきたし、脈拍も平地と変わらなくなってきたので、5000メートルには完全に順化しているといえるだろう。後は天候回復を待つばかりである。他に問題があるとすれば、テントの中で坐りっぱなしなので、腰が少し張ってきたかなという程度である。

今までの自分の経験では順応の壁は5000メートルと6000メートルの二つあるようだ。人によっては富士山くらいでも高所の影響に苦しむことがあるようだが、私の場合は4000メートル台前半までは自覚症状的にはほとんど

高所の影響は受けないようだ。5000メートルに順応すると次は5500メートルくらいまでキャンプを上げて問題ないようだ。6000メートルに順応すると、次はデスゾーンといわれる7500メートル近くまではなんとか行けるようだが、デスゾーンに順応することはできないので、酸素を使用しない限りは一刻も早く登頂を済ませて下山するしかないようだ。

今回の場合のストックカンリは6135メートルあるので、5000メートルに順応したばかりでは、山頂付近まで行けば多少は高所の影響は出てくるだろうが、それほど長時間6000メートル付近に滞在するわけではないので、体に影響が出る前にBCに下山すれば問題はないと思われる。

昼前にテントから出て見ると、小雨混じりのどんよりとした天気には変わりはないものの、BCの状況は一変していた。テントの数が朝の3分の1以下に減って閑散としているのである。

今日は日曜日。この土日でのストックカンリ登頂を予定していたパーティーが悪天続きで登頂を諦めて下山したためだと思われる。私の場合は予備日が2日あるが、果たしてこれが効を奏してくれるか、はたまた退屈な日々が続くだけに終わるのかは、神のみぞ知るである。

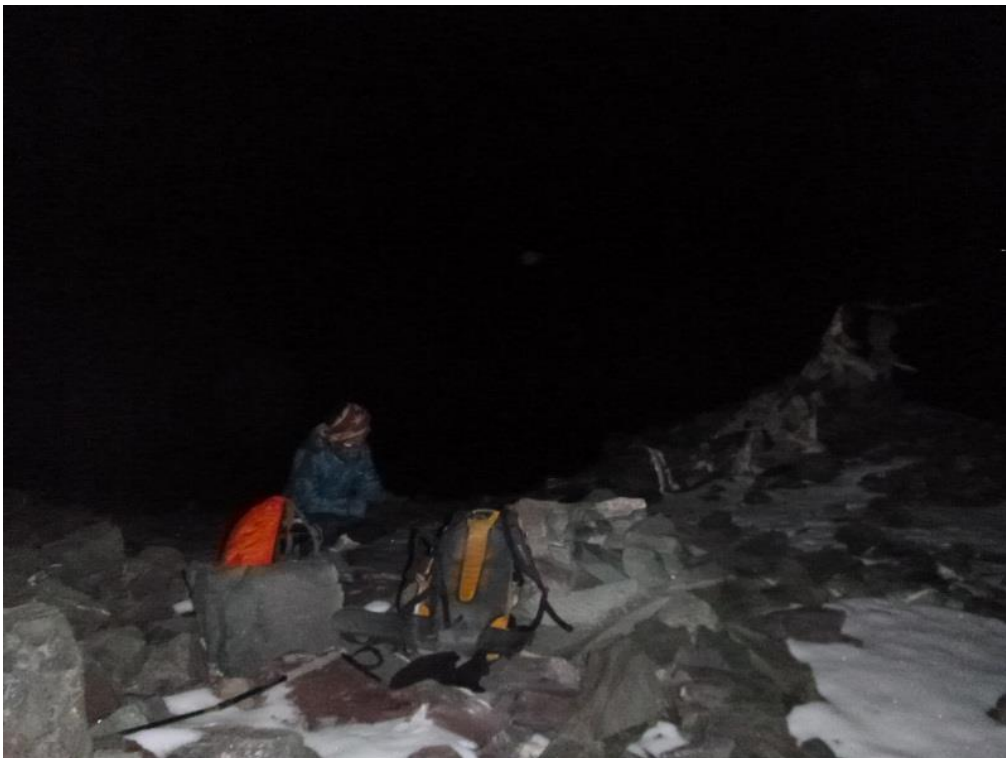
ところが午後になると雨も止み、青空も姿を見せるようになってきた。これで明日の頂上プッシュの可能性が見えてきた。因みに日本人として初めて8千メートル14座登頂に成功した竹内氏によると、海外ではもはやアタックという言葉は使わず、サミットプッシュと呼んでいるとのこと。初登頂や困難なルートからならともかく一般ルートからの登頂にアタックというのは私も大げさだと思うので、この記録でもアタックではなく、プッシュと表記するつもりだ。

天気は回復、体調は万全で頂上プッシュに向かうつもりだが、なぜか顔が少しほてっている。風邪を引いたはずではないのだが、念のために風邪薬を飲んでおいた。

いよいよ明日出発が決定する。6時夕食の後、数時間仮眠して0時起床し、1時出発とのこと。そんなに早く出なくてもとも思うのだが、いた仕方ない。これじゃ明日の午前中にはBCに降りてきちゃうかも（と、その時は甘い予測をしていたのだが）。

7月22日

前夜11時半に起床して荷物を持って食堂テントに行き、朝食？のおかゆを食べてから0時15分にストックカンリ（6135メートル）のサミットプッシュに出発する。



前日までの悪天とうって変わって満月が出ている。そういえば5年前のガッシュャーブルム2峰のサミットプッシュの時も満月だったなあ～。あの時は頂上岩壁の下を左から右にトラバースしたが、今回は逆に右から左にトラバースしていく。どちらも頂上稜線に突き上げる所が急になっていて核心のようである。BCから前進BC(今は使われてない)までの標高差は約500メートルあるが、2時間で登ったので、1時間あたり高度は250メートルとまずまずのスピードである。さすがに2日間のBC停滞で順化ができてきているようである。この分なら夜明け頃には登頂できるのではないかと思ったりもした。前進BCから頂上稜線までは標高差約500メートルの急斜面である。さすがに標高5500メートルをこえると息切れがしてくる。ここで頑張ってしまうと高度障害になる危険があると考え、息切れしない程度にペースを落とす。そのため、頂上稜線に達する前に夜明けを迎えてしまった。頂上稜線直下はかなりの傾斜となり、先行するパーティや後続するパーティが多数見られる。



今回はコックが用意してくれる行動食の外にアミノバイタルやカロリーメイトを1回分だけ用意してきたが、今回一番きついであろうこの斜面では、急遽参加不能となったKさんが別れ際に空港でくれたキャンディーをなめて頑張った。Kさんの分まで頑張らなくっちゃいけないという気持ちからである。

頂上稜線は案に相違して、八ヶ岳の横岳稜線を思わせるヤセ尾根である。ところが、固定ロープは設置されてなかったなので、ガイドパーティーはここからアンザイレンである。



いつもの山行ならばロープなど必要としないレベルであるが、ガイド山行を選
択した以上は電車ごっこもやむをえない。それよりも参ったのは、安全の責任
上からだろうが、ロープをぐいぐいと引っ張ることである。ガッシャーブルム
2峰の時は、それに応じてペースを上げたことが高山病になった原因と思われ
たので、今回は無視して自分のペースを守ることにした。

自分の高度計が狂っていたようで、まだ先だと思っていた頂上に意外と早く着
いてしまった。



8時20分登頂だから約8時間くらい要したわけだ。本当は6時間くらいで登
りたかったんだけど、高山病を防ぐためだからやむをえまい。

頂上には30分くらい滞在して、他のパーティーが下山した後に最後に下山する。途中登ってくる2パーティーと出会ったが、ガイド山行の女性は相当辛そうな表情をしていたので、果たして登頂できたのであろうか。

下りはアイゼンをつけての電車ごっこがまた始まるが、こんなところではロープはいらないんだという気持ちから岩場を駆け下るようにして下っていた。頂上稜線に別れを告げて、前進BC目指して下って行くが、斜面の一部氷化した上の雪が腐っていて実に歩きにくい。そのうちに体に強い疲労感が出てきて頻繁に休んでしまう。どうも頂上稜線を駆け下った影響がでてきたようである。

しばらくは休み々々歩いていたが、振り返ると先ほどすれ違ったパーティーが頂上稜線と別れて降りてくるのが見える。彼らにまで追い抜かれてはまずいと思ってペースは遅いながらも休まずに歩いたので、BCが目と鼻の先のところまでは抜かれずにすんでいた。ところがガイドの知合いの人が温かいジュースを持って出迎えにきてくれ、ガイドと長話を始めてしまった。出迎え自体は嬉しかったが、疲れていたのもので、いいかげんにBCに降りて、テントで横になりたかった。お陰でこの日BCに戻ってきた最後のパーティーとなってしまった。

久しぶりに6000メートル以上のピークに登れたのは嬉しかったが、後半バテバテとなってしまって、思うような登山ができなかったことが悔やまれる。

どうもこれで心残りなく、高所登山から足を洗えるような気分にはなれそうもない。次はどここの山に登るのであろうか

